

新發  
車大寺不實錄  
全

13  
3271



四方山人序  
腹膺秋人序

開此所  
不不

# 新發幸大寺不實錄

鳴田金谷著

朽面房梓

鳴田振袖校

幕明日上



東西東西雖高於茲奉

書今度釋於幸大寺之儀

而著一卷以題不實錄也

故四方山人雖乞序有牙

者無角有方人無厲未筆

採後于彫刻故四方之各



酒爲名代不相似醪酏于  
惡酒而如左護叙文之云  
訣其爲演舌如斯矣  
四角画之篠塚浦右衛門  
曰モフス



序

隅田水清以洗里魚濁以  
濯糞擔如依鯉尋屎白太  
郎姓葛西氏也鯉戀屎異  
音而同訓也點畫相似曰  
烏馬馬歟今鯉戀屎形體  
不相似故是於天馬云馬

物<sup>マナカイ</sup> 齟齬<sup>タラケ</sup>者<sup>ナルハ</sup>于<sup>ハ</sup>武<sup>オ</sup>陵<sup>エト</sup>繁<sup>ハシ</sup>花<sup>クワ</sup>故<sup>ルカ</sup>  
也<sup>ハ</sup>夫<sup>レ</sup>親<sup>レ</sup>糝<sup>ハ</sup>團<sup>コ</sup>無<sup>レ</sup>角<sup>ト</sup>與<sup>ニ</sup>田<sup>カク</sup>樂<sup>ハ</sup>  
有<sup>ト</sup>角<sup>ト</sup>矣<sup>ハ</sup>團<sup>タ</sup>子<sup>コ</sup>者<sup>ハ</sup>堅<sup>カク</sup>也<sup>ハ</sup>田<sup>テ</sup>樂<sup>カク</sup>  
者<sup>ハ</sup>茹<sup>マワ</sup>也<sup>ハ</sup>團<sup>タ</sup>之<sup>コ</sup>形<sup>カタチ</sup>圓<sup>マドカニ</sup>而<sup>シテ</sup>堅<sup>カク</sup>田<sup>テ</sup>  
之<sup>カタチ</sup>容<sup>シカクニメ</sup>方<sup>シ</sup>而<sup>シテ</sup>茹<sup>マワ</sup>謂<sup>イフ</sup>所<sup>コト</sup>堅<sup>ケ</sup>者<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>  
通<sup>ナリ</sup>也<sup>ハ</sup>茹<sup>シ</sup>通<sup>ス</sup>子<sup>ナリ</sup>也<sup>ハ</sup>諺<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>徒<sup>リ</sup>花<sup>ハ</sup>  
團<sup>タ</sup>子<sup>コ</sup>時<sup>キニ</sup>于<sup>ニ</sup>花<sup>ハ</sup>咲<sup>ヒ</sup>旋<sup>子ムネ</sup>退<sup>ル</sup>屈<sup>キタ</sup>曰<sup>ル</sup>

噓<sup>ア</sup>口<sup>ク</sup>如<sup>キ</sup>田<sup>カ</sup>樂<sup>カ</sup>金<sup>キン</sup>苦<sup>ク</sup>通<sup>セ</sup>人<sup>ニ</sup>提<sup>テ</sup>  
来<sup>フ</sup>新<sup>ニ</sup>發<sup>ボ</sup>幸<sup>チ</sup>大<sup>ト</sup>寺<sup>ニ</sup>之<sup>ノ</sup>記<sup>ヲ</sup>乞<sup>フ</sup>序<sup>ヲ</sup>  
予<sup>レ</sup>雖<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>通<sup>ス</sup>簿<sup>ウ</sup>鈍<sup>ボ</sup>生<sup>ウ</sup>得<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>  
恥<sup>シ</sup>屋<sup>ウ</sup>漏<sup>ク</sup>矣<sup>ハ</sup>歌<sup>ウ</sup>曰<sup>ク</sup>親<sup>マ</sup>哉<sup>ヤ</sup>親<sup>マ</sup>哉<sup>ヤ</sup>  
為<sup>レ</sup>如<sup>シ</sup>何<sup>マ</sup>南<sup>カ</sup>瓜<sup>チ</sup>之<sup>ノ</sup>胡<sup>コ</sup>麻<sup>マ</sup>汁<sup>シ</sup>何<sup>ナニ</sup>  
而<sup>シテ</sup>宜<sup>ヨ</sup>哉<sup>ヤ</sup>為<sup>レ</sup>於<sup>ニ</sup>市<sup>コト</sup>馬<sup>ナ</sup>鑄<sup>シ</sup>梓<sup>シ</sup>云<sup>ハ</sup>  
爾<sup>ト</sup>皆<sup>シ</sup>天<sup>ノ</sup>明<sup>ミ</sup>七<sup>ノ</sup>丁<sup>ノ</sup>未<sup>ミ</sup>春<sup>ノ</sup>出<sup>デ</sup>替<sup>ル</sup>

日撰

尾樓長柄葛西氏



不實録序

涅槃經云女人大魔王能

食一切人佛味其曰美哉

雖末世為城主深示之破

戒之徒不逞數也昔法水

寺一寺蕩心于楊姓今幸

大寺智職者翁第末子お市然

不稱赤貝而稱毛鱗頭者未  
新坊和尚所誦經法余  
人島田金吾作之末歷復  
編次道行雜劇於一殿讀  
之應何而識者翁翁之趣意  
也吁呼教化者經之餘力  
竊食毛鱗決甘美此豈立而

流為女人字在於海内一切  
人還而亂於道路矣寔  
使一物性類者其斯之  
認與

天明丁未春三月

腹名種人撰

雲笈 寫田金谷著

青丹あまにと一ひと奈良ならと東大寺とうだいじ何なにで離りがある東あづまの  
 廣德寺くわんとくじ此門このかど何なにの門かど丙午へいごに至いたる大おほなる行ゆれ  
 天下あめの人ひとぞもも門かどと衆人しゆじん剛こゝろるこゝろと廣德寺くわんとくじ  
 の門かどらもふ其用そのもちる車くるまと云いふ門かどの上うへ下した之これ外ほかや  
 平島ひらしまもんが門かどとも甚たゞし禁壇きんたん鳴門なるい門かど不ふ  
 名なるこくこ也なり子こ正ただ目めハ軍ぐんつら不ふ眼まなこ反さか肆し寸すん陰かげ者もの

の江門えもんすし痛いたしずや千茲ちんし氣きまぐれの二壽にじゆ  
沈ちん河がの原はら嶋しま小葛こが西せい幸きやう大だい和わ尚しやう滿まん休きゆうと  
俱い有ゆう沈ちん河がの原はら嶋しま小葛こが西せい幸きやう大だい和わ尚しやう滿まん休きゆうと  
幸きやう大だい和わ尚しやう滿まん休きゆうと  
お千代半ちんざいはん之の間まが徒と有ゆう能ねくお布ふが毛け鏡きやう  
頭あたまの甘あま味あじと隨したが守まも幸きやう大だい父ちちの物もの氏うぢ萬まん樂らく  
齋さい母ははの徳とく蕩たう氏うぢ女むすめ妻つま婦ふ或ある付つ弓ゆみ割きり道みち鏡きやう  
大だい象しやう鏡きやうお千代半ちんざいはん之の間まが徒と有ゆう能ねくお布ふが毛け鏡きやう  
大だい象しやう鏡きやうお千代半ちんざいはん之の間まが徒と有ゆう能ねくお布ふが毛け鏡きやう



汝がて事この種々靈気祀りて不怠  
形る二年はるるの母は産の氣け  
安しぬ事之思のるが父樂有母之亦て曰  
天竺釋迦は来ハ三年月て生れ漢土の  
老子ハ十年月て生れ已不登に我まの道  
鏡象は覺すて夢又て孕むはれハ生る  
子果して實なるを一何なりさなく思  
た又兔角して半年は送る。或夜母

の醫方いひあり、痛出いたして三日三夜お正ま衆醫しゆい  
評義ひやうぎ我われ匠じやうく、多病たびやうは寸すんの妙まう由よし卓たつ  
山井やまゐ卷仙まきせんの老医らういの八種はつしゆ皆みな七  
医業いぎやうは経けいて、中ちゆうを志しす、書しよ藉じやく之し眼がんは肆し  
一萬物いちまんにぶつ造化くわいけい下かして明めいらるら、皆みなす、すく、之これ事こと也なり  
病びやうは見みる、車くるま百ひやく後ご百ひやく中ちゆう一いつて、常じやうは寸すんり  
如ごとく一いつ妊にん娠ごんく、多た殺ころ多たある、中ちゆう小せう二に年ねんと過とて  
尻しりは、いゝある、是こゝに古こ今けい未ま曾そ有う之これ醫い方はうは、病びやうる

この痔し之の痔しハ寺てらノ厲り之後のちを犯おして孕な  
る、この是こゝ之の秘ひ計けいは、出い産さんある、胎たと毎まいに揮かる  
ア、一いつ度た大だい胆たんは、一いつ先せん取と上うを、人ひと  
人ひとは、未まく、也なり、造ぞうは、菰こもよ、こゝに、内うち頻しん之の尿せへ  
を、ア、が、あ、て、上うは、下かへ、と、乱らん割せき妊にん婦ふ、く、一いつに  
叫こゝろんで、花はなく、く、を、作しや寸すん皆みなく、驚おどろき、ま、つ、尿せを  
ま、つ、ま、つ、見みる、は、吐は門もんさ、けて、血ちが、れ、玉たま顔がほの  
男おとこ子こ出い生しやうして、お、こ、る、ア、の、左ひだり疝せんが、よ、れ、ハ

又ちり収めて多の舞足のぬむ所は  
あまの寸さそ火は燈一能見れは出るる  
事と異あして利下天の権者之すは  
ぼく強大ける事牛の角の如くされも  
母ハ鹿のくわゆる事かたハ何れ以て  
あま其あを淋り山叔味始念するも  
鹿佛云醫定又思くく釋迦三年ま  
して生れ我子二年半あして生れすま

カハこしガリケルンニ我まはける子  
御見守見生れまられのつこ事之れす巻仙  
がける醫産は存り萬すと何れが成るの後  
油門母が母が菩提成も弟志のんと  
一次育ルの形して其方母がやれは父  
るる意道學の鉄火長老見そ  
まぐの事は諸貴僧のすふたし  
めん頼れは長き道鐘があの始終

二年半あしあ母の尻と申出づるの物  
さるも何んかんの凡がさるる男もさるる女も  
と依りてあしあ母の尻と申出づるの物  
論書精義はさるるまじき事なりてはるる  
かく引てはるる春画はさるるまじき事なりてはるる  
さるる満願酒一何之女多羅三百出づる  
佛店二百投込の浄土のぐり下品下生と見  
かして飛走聲のは駕よれ申のさるる

かき内陣に入てはあ母の四十八願と釋迦  
十の貴身は知り奈加何加の利益はさるる長  
老子が奇生なるはさるる一寺の住職なる  
あんと母の腎と申出づる一筆土り縁  
何れがさるる昔西り一寺は建てる一多づりて  
珍宝幸大さるる心○要按るこ志んが幸  
大さるる心流之陰莖の推はちんがさるる  
珍宝幸のひみちさるるは以て寺号

と寸幸大なる道鏡が再誕あり○爰にまゝ  
百性助を劇とふもの一人の娘をとり  
容貌は美艶ならずしてはるす居れば兼  
年も二八の如くけりて庇はるる青の  
佛法に入て終日終夜幸大なるまあつて  
いとやほききく一日和尚と見て歎く曰  
我幼少のころより不とけの道よんゆゆ  
祢づつそモラふ祢名不怠とともばはる佛

の利益廣大なるは目下こそぞおーえ  
てくく居せんは持かくは和尚歡喜  
て日善哉く汝信心定の上ハ經外別  
傳の妙亦こそよむる一娑婆良寂光  
高きやなす此牙へ来るをーとて  
お市は伴の一問は内へ入る暫く去り  
うよーて聲なく居あつて兩人室を出る  
よお市目録伝をして師の尋とする

なぐりし守膳しぜんなりとてえりしと申す夜  
の袖そでへ正ただしとすがりすうらむ位かゝにたゞるるは  
是これや正ただしとすがりすうらむ位かゝにたゞるるは  
此この婦むすめ前まへ生なま野の魯ろ國こくの大だい象しょうなること  
日本にっぽん大通だうつう國こく師し汝に背せいなり無なののををままりする  
善ぜん國こくの依よて今いま人ひと衆しゆ又また生なま汝にけ助すけ言げん  
が美つよしあののの腹はらにやとて出生しうしんしてとて饑う頭づか  
汝に好このむ事こと法ほうりるるを是これたる象しょうの

生せいま何なにのの寸すん幸きんたも道みち鏡かがみが再また誕たんでし一ひとて象  
汝におのすのの瑞さい夢む何なにのの世よの人ひとお申  
を佐たす多たくしてままんんむむすすああののああささたたがが一ひと  
虚こゝろは付ついて百ひゃく大だい室しつ上じやう傳でんふの理り世せいの  
ああままはは湯ゆて咽すすふふあり志し人ひとば幸きん大だい  
ハはちちんんて氣きががそれそれにお申おまをままんんで  
それそれて氣きががそそままりりぬぬすす何なに者ものももああらら  
ん

あつひの遊少くやかき巻のさしめ  
くさつ川とく人もまきつるあ

雪隠ハ形子もあつひ見知りせりれハたふ  
けしむりけしむれず母の尻尻よりて生れ  
かすまゝ我背のひれさるる見あらしが  
毛まんぢうの厚味よふふらんる侍飛  
依ておあが顔頭の皮成剥でけまんま  
はくろ仏あ又見成をく今の世は牛

の皮の毛まんぢうより夢幻泡影の理  
あまやんが焼の動ハあて色即是空と  
ぐあやんまぢれハ秋開悟して風吹ふ  
ゆけ雨あハ筆一本のうちまおつち  
浪伴の二人はくく連立してゆき成  
あつひ定めおるる夜半まぢわて出  
り

乃切屎こい杖おも重に荷



コニジンマヅハリヨムスブニメクリトヨニナトヨモチエ  
 々人結文須攤淫  
 メクリトヨニナトヨモチイガレマヅワリフカカラズ  
 攤淫不須文不深  
 タトヘクワンケノゼニヲトリタメルトモ  
 縦今歡化錢取溜  
 ワイニハメクリトヨニナトタメニフチトナルシマワキニ  
 終是故為測借金











泪をこぼれ多るを侍る中流を居れ多る白く  
次娘志那若小東里坂中若て死にふとて有る  
サア市光接ふらうあ敷をて下見せ業を居る  
孫あじ物とを金彦用之れ一腰ね故し後  
あまの島根り云八寸胸にありれ多る死物か  
後が伝ふる者三歳六秋一歳に極父を留め  
袖ままらうるを遠く人若きふも受け迎る  
因あひて我父一物方若海帰山れまふ多る

正切産け四歳名をげの身近に坐すつらて十八歳  
乳母が病み腹座するを婦あつるを市と依  
みあふると何ぞ一みまひてせてみ物も  
下へ年々存せらうとて教中ちうみ物れ進ん  
くと若き中みのおらうと云うとちんをれ解る  
けらるるをまも上マアらみ孝を親と親とれ抱  
もあむねと云うる女若中よく居場ま正ら  
あま二歩のちうくちうくたも金彦を

那十後増のひの平政りありぬ後とて味なり  
改(キ)の智(チ)の蒲(フ)懐(ケ)や後世(ゴ)の山(ヤマ)椒(カ)北(キ)実(ミ)身(ミ)中(ナ)く  
自(ジ)の勝(カ)たふの夏(ナ)乃(ノ)皇(ス)出(デ)我(ガ)北(キ)前(ゼン)軍(クン)臺(ダイ)老(ロウ)  
正(テイ)海(カイ)之(シ)也(ヤ)ちと相(ア)ひれ子(コ)作(サ)高(タカ)為(ナ)北(キ)宮(ミヤ)有(アル)小(コ)村(ムラ)  
飯(イ)原(ハラ)六(ロク)合(カ)七(シチ)合(カ)三(サン)のつ國(クニ)北(キ)第(ダイ)一(イチ)の村(ムラ)有(アル)三(サン)井(イ)  
之(シ)子(コ)の後(ノ)座(ザ)とて集(ツ)み去(サ)るれり山(ヤマ)て育(ソ)つて平(ヘイ)塚(ツカ)  
乃(ノ)モ聖(セイ)とて後(ノ)世(セ)に多(オホ)まるれり跡(アト)年(ネン)正(テイ)統(トウ)てまの世(セ)に  
有(アル)るるを平(ヘイ)らに実(ミ)名(ナ)物(モノ)れに伊(イ)呂(ロ)波(ハ)之(シ)にのち後(ノ)世(セ)

此(コ)嶽(タケ)之(シ)ていれれを亦(オホ)みひのちのぬ八(ヤチ)月(ツキ)辰(チン)也(ヤ)  
れいふふち登(トビ)着(シヤ)ちる三(サン)女(メ)れ居(イ)るに七(シチ)年(ネン)のちくを亦(オホ)集(ツ)むれ  
利(リ)れ流(リウ)る是(コト)其(コト)ありや下(カ)の流(リウ)れむ事(コト)あり  
とに教(シヤ)ふ事(コト)也(ヤ)四(シ)のれ女(メ)に嫁(カ)りて二(ニ)回(クワ)も後(ノ)世(セ)に  
とちありる因(イン)果(カ)地(ヂ)産(サン)れいんをその般(パン)子(シ)方(ホウ)候(コウ)也(ヤ)  
きりり相(ア)当(オウ)路(ロ)の七(シチ)扱(キ)ひハツア進(マシ)めりてく知(チ)面(メン)女(メ)  
不(フ)可(カ)内(ナイ)心(シン)也(ヤ)夜(ヨ)に彼(カ)れ女(メ)不(フ)可(カ)りていんをその般(パン)子(シ)方(ホウ)候(コウ)也(ヤ)  
傍(トビ)りて元(ゲン)皇(ス)海(カイ)家(カ)の北(キ)家(カ)れ後(ノ)世(セ)に有(アル)るに

種まをれし野もふらふ。よくか来れ来取高実のうら  
みぬことありてものまじきまきあひつらりしれぬ来  
てみののくられぬもえきさきあひ敷でこぼる種も白黒の  
如く家杖多字種在伝集こまわりきたるをきたる  
一物氏は名もよびて世は伸れ女は結違く子つ不  
なるは謀生妻更くいふるははたあきらむまじき  
とてみるにありし松平場よりてそのりく途をて  
くし多るもえきせよ。よくか来れ来取高実のうら

上は坊主のむらやがらとく人利とあるつてか  
てきうむくするのれはあひぬ裸而日後の伝法も  
られ七宝なれはつとありもあられそ目上之命。から  
ちるやあきらむことあつとありてうけつる  
つらむしむるしれむえきあひれ種まゆして春のま  
あせこのあひの河れとあつと風へ山は松みりて  
属れぬむらやがらとく名れえやけよれ情み我  
く二三が鳥物たえむけし種まゆつてか市正造





後叙

幸大寺始末阿まは 冥是此之幸子  
色有りて黄色ゆゑ甘葛西の尿多  
こまの筆書よる其尿尿尿の二完  
して生ず及し死に及ぶすまじ大がや  
今苦す不実録ハ予下也甘葛師 養王  
老人有り固て信書あり一付見すする所  
皆空虚甘の志がく 征考の徒を分

此趣向成とる平 顛倒 一文は綴るよ

かつて成忘れ全文をよつり 雲のぞ  
此真氣成 吾後人ハ 東都ニ 坐す由

四才山人見才分の 腹唐とく人が  
帝 跋反一 疑らゆすれハ 本文すハ

かみかぬく 借家子貸て 本家成あり  
本醫子して 大屋の裏住り ありて

店ちんの 歸りぬるよ 記す不実録の

不存せしむるがたけの裏住大の阿て  
 日文中初て飛し藤山化意河重  
 の尻のわし蒲共よりふ命じて芥留  
 へ推へし予歎して日蛇は画てふ成  
 却して望屋介紫守下鉄の吐ハ  
 飛下る見る人我は証得せバ我又  
 五して救尻せんブミと云云  
 金谷述

不實録跋

廿一毛唐人の鼻喝止の川の詩經  
 とくする書向の流の喝は弄ぶ車一和  
 徴お回しと幸大寺が放蕩は表て  
 見ははうふ予が兄分嵩田金谷幸を  
 の始末は集の一冊の尻はす懸一一天  
 不實録と云見分ハ馬士ころは以て必  
 とし吾二十振袖四十字の重強を

以て公とす。孔子、童謡を以て萍實と  
無じとす。幸大寺に於て我々、則此を  
以て公とす。わが書に云く、わが心、わ  
が書に於て、依て此冊を以て書林とす。  
書林見れば、見えて謂て曰、お申が事、如何  
可也。是は懐かき事去る、わが書に  
頭は、不懐かき事、其味、ひまき、ん、ん、  
圓して、雲の如く、云者、わが書、其書、

汝以て、一冊へ賣入、免角、浮世、陰門  
と屎穴と、二物、汝、知、せ、て、一冊、の、趣、意、仍  
て、如、件、と、落、し、お、ま、以、て、此、書、の、所、在、  
ぬ、く、ふ。

二時、天明、丁未、歲、禊、月、廿、四、日、振、袖、藏、所  
へ、落、書、の、息、を、以、て、す。



跋  
上人の書に云く、谷予が面は踏板の  
上より思集りて一書りて法華の  
心集りて以集りて法華の心集りて  
心集りて以集りて法華の心集りて  
心集りて以集りて法華の心集りて

一拙者も此夜真談法著述し  
んを御中及様所法をこぼつて  
成る暇にせしむれば法入り以集りて

の本化意はく、く、く、の羅糸  
とも一云く、く、く、く、の羅糸

一六四七年二月 山人  
山崎田金谷  
原取草堂

大屋裏住僧

見る人吾も免どして此云の杜撰  
可くも、く、く、く、く、の軍

何<sup>れ</sup>を<sup>れ</sup>為<sup>れ</sup>そ<sup>れ</sup>北<sup>び</sup>微<sup>い</sup>意<sup>い</sup>は<sup>は</sup>噓<sup>う</sup>き<sup>き</sup>ん<sup>ん</sup>知<sup>ち</sup>  
 ぎ<sup>ぎ</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>ち<sup>ち</sup>し<sup>し</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>せ<sup>せ</sup>よ<sup>よ</sup>是<sup>れ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>  
 院<sup>いん</sup>北<sup>きた</sup>せ<sup>せ</sup>の<sup>の</sup>子<sup>こ</sup>路<sup>ろ</sup>吹<sup>ふ</sup>口<sup>くち</sup>平<sup>へ</sup>重<sup>ちゆう</sup>す

大屋の〜信



天明七年

三月吉日

油

